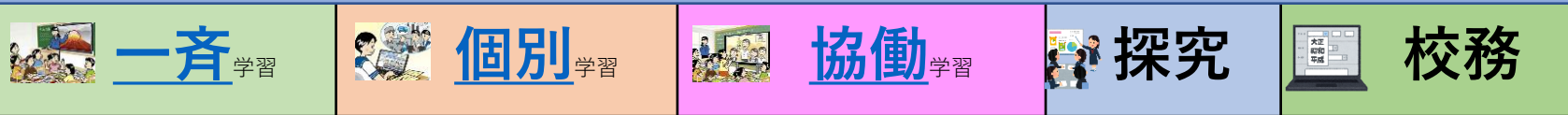


山形県 ICT活用4次元モデル

本モデルの使用例

- ステップ1** ①ではICT活用場面を知り、②では自分のICT活用度を知り、児童生徒が「主体的・対話的で深い学び」＝「児童生徒が主語」となるような授業を作ってみては？
ステップ2 ③では①②にてICT活用のイメージや実践等ができれば、教科横断的なまとまりをもって体系的な情報活用能力育成につなげてみては？
ステップ3 ④ではICT活用のレベルアップや、情報活用能力育成レベルの見直しをタイミングごとに実施してみては？つまりカリ・マネです。

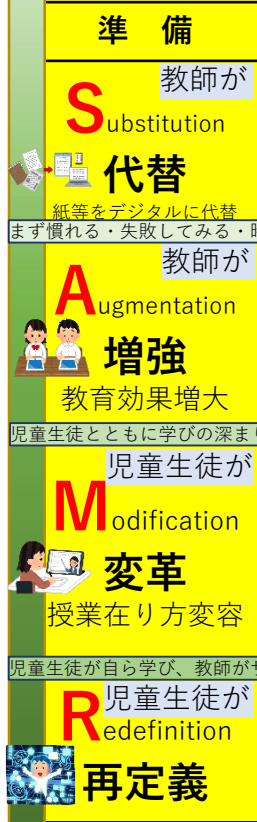
① 学校におけるICTを活用した場面*1



情報モラルからデジタル・シティズンシップへ

② ICT活用度 SAMRモデル*2

この基準は絶えずバージョンアップしていく2021-2022時点



準備	●クラス機能作成やデータのクラウド保存、共有等 ●課題出題 ●遠隔授業 ●その他ICT活用方法と実践			
S ubstitution 教師が代替	●板書⇒大型提示装置 ●プリント⇒端末間資料共有	●プリント⇒アンケート機能 ●手書き記録⇒画像撮影 ●地図探索機能で思考深化	●模造紙等意見共有⇒ドキュメント、ホワイトボード・表計算機能で児童生徒思考可視化・共有化	●児童生徒・教員間紙連絡⇒チャット機能やPDF ●学級通信等⇒リンク等限定配付
A ugmentation 教師が増強	●アンケート機能即時配付回収 ●動画等手本による教示	●シミュレータで試行・思考深化 ●アンケート機能で児童生徒作成問題解き合い・学び合い	●ホワイトボード・表計算機能等で問題解き合い・意見交換・学び合い ●上記別例 ●グループ学習結果の協働編集⇒聞き手意識し発表	●アンケート機能等保護者面談日程調整 ●アンケート機能等児童生徒・教員体調報告・欠席連絡
M odification 児童生徒が変革	●児童生徒の選択・タイミング動画・説明PDF視聴→理解深化 ●クラス・学年・学校・国を超え外部や児童生徒講師オンライン受講	●児童生徒の選択・タイミングで動画や説明PDF視聴→反転学習→授業は学び合い ●アンケート機能自作問題クラウド上掲載、家庭学習	●A「増強」+スタディ・ログ化、児童生徒自ら次に生かす ●クラス・学年・学校・国を超え、ホワイトボード機能等で意見交換・多様な思考触れ合い・学び合い	●スタディ・ログで児童生徒自ら弱点克服・得意教科発見・伸長 ●ホワイトボード機能・アンケート機能生徒主催集会等
R edefinition 児童生徒が再定義	メタバースやブロックチェーン等のICT新技術をツールとした ●一層児童生徒が主体的、対話的で深い学びに一層つながる学習活動 ●地域等の課題発見・解決や産学官連携等、社会に開かれた教育で新しい価値の創造につながる学習活動 ●児童生徒が授業の主語となり、教師は伴走者になる、授業の新しい在り方が定着			

活用方法例と実践例*4
 ①課題の設定↓②情報の収集↓
 ③整理・分析↓④まとめ・表現の場面毎にICTを有効活用

「学校ごと」や「教科ごと」や「教科を超えて」
 情報活用能力の体系的な育成
 教育センター参考データ集

- 参考URL(クリックでジャンプ)
 ●山形県立学校ICT活用ガイドライン第6章情報の取り扱いについて
 ●文科省 情報化社会の新たな問題を考えるための教材
 ●経産省 未来の教室STEAMライブラリー「デジタル・シティズンシップ」で検索

④ ①～③を年度や学期等タイミングごと見直しレベルアップやレベル再検討 カリ・マネ*3

- 例えば▲▲情報活用能力ステップ表
 例えば○学年情報活用能力ステップ表
 例えば◇◇学校情報活用能力ステップ表

③ 教科横断的ICT活用による情報活用能力育成

*1 文部科学省「学びのイノベーション事業」実践研究報告書 2014 *2 Ruben,R.Puentedura 2010 *3 文部科学省「学習の基盤となる資質・能力としての体系表例とカリキュラム・マネジメントモデルの活用情報活用能力の育成」 *4 山形県教育委員会、山形県教育センター「山形県立学校ICT活用ガイドライン」資料集 2022